

Europhras2010に参加して

住吉 誠 (摂南大学)

2010年6月30日から7月2日にかけて、スペインのグラナダ大学で開催されたEurophras2010に参加し、研究発表をする機会に恵まれた。筆者はEurophrasには初めての参加で緊張もしたが、聴講した研究発表の数々ではフレイジオロジーの最新の研究成果に触れることができ、とても有益な機会となった。以下はその簡単な報告である。

筆者が聴講した研究発表は (1) MOLINA PLAZA & DE GREGORIO, “The translation of metaphorical and metonymic colour proverbs and idioms: points of contact and departure” (2) KAYUMOVA, “Contextual Translation of English Phraseological Units into the Russian Language” (3) MARTÍ SOLANO, “The current world economic crisis: phraseological equivalents and variants in English, Spanish, and French” (4) ZULUAGA, “About Formulaic Expressions” (5) LANGLOTZ & KUIPER, “Phraseology under pressure: the need for a standard terminology” (6) GUTIÉRREZ PÉREZ, “Metaphor, body, and culture: Cross-linguistic and cross-cultural perspectives” (7) KUIPER, “The reports of medical specialists as a formulaic genre” (8) KJÆR NISSEN, “Contrasting body parts in Danish, English and Spanish: What is meant by ‘nose’ and expressions containing ‘nose’?” (9) MENDELSON, “Contrastive Analyses of Biblical Phraseological Units in the English and Russian Languages”などである。ワークショップでは (10) Annelies Häcki-Buhofer, “Collocations - theoretical and lexicographical aspects” (11) Natalia Filátkina, “Manifestation of culture in the historical phraseology of German” (12) František Čermák, Elizabeth Piirainen, Joanna Szerszunowicz, “Motivation, Culture and Phraseology” (13) Angel López García, “The neural basis of phraseological constructions” などの発表を聴いた。

これらの発表を聴いて、フレイジオロジーのヨーロッパでの広がり、またなにより、フレイジオロジーという研究領域のすそ野の広がりを実感した。八木先生が『英語教育』Forum 欄 (2009年6月号)で書かれているように、フレイジオロジーが持つこれからの言語研究のあり方の可能性を肌で感じる事ができたのは幸いであった。

それぞれの発表を聴講し、筆者が感じたことは三点ほどにまとめることができる。

一つ目は、フレイジオロジーで議論されていることと、日本でこれまで蓄積されてきた、特に翻訳論の知見との類似性である。筆者が聴講した発表では、ある表現やコロケーションを取り上げて、対照言語学的に分析する発表が多く見られた((1) (6) (8) (9) など)。その議論の中では、これまで日本の翻訳論で議論されているような知見が改めて主張されていることも多いと感じた。このようなフレーズやコロケーションの対照研究では、A 言語のフレーズとそれに形の上で対応する B 言語のフレーズの中には、全く同じ意味を持つもの(または違う意味を表すもの)がある、A 言語のフレーズが持つあるニュアンスが B 言語の対応するフレーズでは消えてしまうものがある、などといった日本人が翻訳論の中で一度は聞いたことがあるような議論がなされていた。開国以後、翻訳によって外国の文明や文化を摂取してきた日本には、この点に関する莫大な知見の蓄積があり、日本人の研究者も

多く貢献できる分野ではないかと思う。

二点目は他の理論言語研究とのシナジー効果である。認知文法の知見がフレイジオロジーの研究に影響を与えているようである。(6)の発表は、英語、イタリア語、スペイン語、フランス語、ドイツ語の5つの言語に見られる **heart** という語を使ったフレーズの対照研究であったが、その対照研究の議論の基礎に置かれていたのは **HEART IS CONTAINER FOR THE EMOTIONS** といった認知言語学的な考え方であった。これとは逆に、フレイジオロジーの分野でなされた研究が、他の理論言語学の研究に影響を与えていることも多い。今回の発表ではないが、例えば イギリス的なフレイジオロジーの代表的な研究のひとつである Hunston & Francis (2000) *Pattern Grammar* は動詞・形容詞・名詞のとりパタンの研究であるが、これが構文文法の Goldberg (2006) *Constructions at Work* に引用されている。また、(13)は、フレーズを理解を脳神経からせまったものであったが、残念ながら筆者の知識はそれを理解するほどには十分ではなかった。いずれにせよ、このような一連の発表は、フレイジオロジーと他の分野との連携の可能性を感じさせるものであり、フレイジオロジーという分野の学際的な広がりを示す一例であると言えるだろう。

三点目は、フレイジオロジーという分野の成熟である。Granger, S. and Paquot, M. (2008) “Disentangling the phraseological web” in Granger, S. and Meunier, F. *Phraseology: An interdisciplinary perspective.* (John Benjamins) は、フレイジオロジーに見られるふたつの潮流について触れている。ひとつは東欧的な伝統を持つ流れであり、もうひとつはイギリスで行われている Sinclair の流れを汲んだものである。(5)は、このふたつの流れに「対話」の場所がないことを指摘した発表である。Europhras は東欧系の流れを汲んだ研究者の交流の場であり、イギリスの流れを汲んだフレイジオロジーの研究発表がないという。(5)は、まずは、このふたつの流れの中で用語の統一の必要であることを訴えるものであった。筆者は、イギリス流のフレイジオロジーに親近感を覚える者であるが、このような議論が出てきたことは、フレイジオロジーという分野が、議論の統一場を必要としているほど成熟してきたことの証左であると思う。

そもそもフレイジオロジーの、特に コロケーション研究とパタン研究においては、日本の英語研究の黎明期をになった斎藤秀三郎、H. Palmer、A. S. Hornby といった研究者の影響が大きく (Cowie (1999) *English Dictionaries for Foreign Learners* (Oxford University Press) ; Hunston & Francis (2000) 上掲書)、日本で行われてきた伝統的な英語研究との親和性も大きい。フレイジオロジーの進展には日本人の研究者も貢献できることが多いのではないかという思いを強くした3日間であった。

(2010/11/23 記)